小説の鑑賞指導

――「青年」（森鷗外）の学習を指導して――

滋賀県立八日市高校
川端俊英

――はじめに――

新国語総合二に、「鷗外と漱石」という単元がある。この単元の

は構成、㈠青年、㈡草枕、㈢鷗外と漱石（猪野謙二）という順になっている。私は、この六月に六時間にわたって㈠青年を取扱ったの

で、その指導記録をここに取り上げてみることとにした。

――教材の内容――

（森鷗外作「青年」全二十四章のうち、第七章、第八章）……梗概

主人公小泉純一は、田舎の中学を終え、しばらく独学の後、明治四十三年、小説家を志望して上京して来た清純高雅な青年である。

純一は、ある日、中学時代の同級生で、美術学校に通っている瀬戸に誘われて、神田の文芸講演会で平田拊石（夏目漱石をモデルとする）のイプセン論を聞く。まじめな純一は、拊石の話によって大きな動揺を与えられる。真実の生き方を求める純一は、この動揺の実体をつきとめるため、会場で知り合った医科大学生の大村荘之助と帰りに熱心な会話をつづけ、最後に、永遠に希求する生き方を考え出す。

――指導計画立案に当たって――

一、この教材は、思想性が強いので、できるだけ理解上の抵抗を少なくする意味から生徒各自の自主的な予備学習をさせる。

二、この教材は、長編小説の一部であるから、できるだけ全文を読ませるようにする。または、梗概を知らせる。

三、この教材は、その時代性を無視しては理解できないので、当時の文芸思潮を明確にさせる。そのため各自にその学習を課す。

四、自主的学習をはかる上から、グループを編成し、発表の機会をつくる。

五、この教材の内容が、「人生いかに生くべきか」という生徒自身の切実な問題であるから、生徒相互の話し合いの機会をつくる。

六、内容がかなり難解であるから、作品を便宜的に大きく分析して指導する。しかし、最後には、それを全体としてまとめるようにする。

七、感想文を書かせ、各自が学習をまとめ、しめくくるようにする。

八、指導の順序を、次のように予定する。

第一時、導入。本文の読み。学習テーマの設定。グループの編成。

第二時、各グループの担当テーマの発表。次時の話し合いのテーマの設定。

第三時、図書館にて、各グループ別の話し合い。

第四時、前時の話し合いの記録をまとめたプリントに基づき、問題点、疑問点を究明。研究問題も平行して取り上げる。

第五時、前時の続きと、残された研究問題の解決。

第六時、全体のまとめ。「青年」を学習しての感想文。

――指導経過の記録――

対象、八日市高校二年四組（H・R担当学級）

第一時（6月2日）

一、まず、「青年、森鷗外」をはっきり板書した後、導入の意味で、生徒達の今までに読んだ鷗外の作品を問う。

「山椒太夫」「高瀬舟」「雁」がたちまちあげられ、ついで「舞姫」「うたかたの記」「阿部一族」そして翻訳「即興詩人」があげられる。これらを順に板書し、「サタ、セクスアリ

ス」はあげられなかったので、これを書き添える。そしてこの作品が「青年」の前年（明治42年）に出されたことも参考のために言い添える。

二、「青年」を今までに読んでいる者を調べる。クラスでわずか二名のみ。

三、板書した作品中、一つも読んでいない者、一つ読んだ者、二つ読んだ者……全部読んだ者、とそれぞれ挙手によって読書の傾向を確かめる。

その傾向は、

一つも読んでいない者、なし
全部読んでいる者、　なし
二つか三つ読んでいる者、大多数
最も多く読んでいる者で六つ位

四、この「青年」は漱石の「三四郎」と同じく青春の小説であるが、「三四郎」のように物語性に富んだものではなく、むしろ思想性の極めて強いものであることを簡単に説明する。

五、直接、本文の読みに入る。生徒に指名。

六、読みの後、二、三人に感想を聞く。「どうも難かしい」「内容がはっきりわからない」という感想が多い。

七、そこで、グループ（男女混合で八名）を六つ編成し、それぞれに、次の学習テーマを与える。

1、「青年」の原作を読み、そのあらすじをまとめる。
2、作者森鷗外について調べる。
3、自然主義文学について調べる。
4、本文中の「世間的自己」と「出世間的自己」とのちがいを調べる
5、イプセンについて調べる。
6、メーテルリンク、ヴェルハーレンについて調べる。

第二時

（6月6日）

一、各グループとも、六分間程度の持ち時間を与え、代表者は教壇で学習してきたところを発表する。残り時間は、全体の質疑応答に当てる。

二、発表者は、まとめてきたノートを読み、他の生徒は、各自重要事項をメモする。

三、質疑の内容、

1、西洋におこった自然主義と、その影響による日本の自然主義との関係、およびその相異点、
2、日本の自然主義という文学思潮の特徴、およびその長所、短所、
3、森鷗外の文学的態度、および自然主義文学との関係、
4、森鷗外と夏目漱石との関係、

四、担当グループは、これらの応答に当たったが、不完全、不明瞭な点については、指導者（私）が補足する。

その際、当時の文学思潮である自然主義の長所、短所と、それに対する鷗外の立場を明確にさせておく。また、質疑に出なかったイプセンについても、「人形の家」を例にとって、その個人主義思想を説明する。

五、次時の予告をする。

1、次時は、図書館にてグループ別の話し合いを行うこと。
2、それまでに、各グループとも、司会者、書記を決めておくこ

と。交代制にしてもよいこと。

3、なお、次時の話し合いのテーマを与えておく。

(イ)主人公小泉純一についての感想、(五分間)

(ロ)西洋の新人と日本の新人との相異について、(十五分間)

(ハ)主人公小泉純一の生き方について、(二十分間)

(ニ)疑問点を出し合い、それについての話し合い、(十分間)

今、右の(イ)〜(ニ)の四テーマを見ると、次のようなことが考えられる。

a、(イ)の話し合いを掘り下げると、(ハ)に結びつくので、(イ)と(ハ)とは重複することになる。

b、また、(ロ)と(ハ)とはとても密接な関係にある問題だから、はっきり切り離しては考えられない。

しかし、敢えてこういう順にテーマを設定したのは、次のような理由によるのである。

a、まず、(イ)を話し合いの導入に当て、(ハ)によって、(イ)がさらに深められるのを期待する。

b、内容がかなり難解なため、(ロ)と(ハ)とは一応別々に話し合わせる。そして、(ロ)の話し合いが、(ハ)を深めるための準備段階となるようにする。

第三時　(6月9日)……図書館にて、

一、各グループに記録用の用紙を配る。

二、司会者は手際よく話し合いを進め、その記録は放課後までに提出するよう告げる。

三、時々、指導者は各グループ間をまわり、話し合いの方向に示唆を与える。

四、各グループの話し合った記録のうち、主なものを次に掲げる。

(イ)主人公小泉純一についての感想、

1、物事の観察、思慮が深い、

2、青年らしい純粋さ、理想がある。

3、正直な人間である。

4、感受性に富んでいる。

5、多少、動揺性がある。

6、とても熱心な性格である。

7、眼識、能力、教養にすぐれている。

8、頼もしいところがある。

(ロ)西洋の新人と日本の新人との相異、

(西洋の新人について)

1、気息が通っている。

2、積極的である。

3、敬虔な態度がある。

4、新しい理想がある。

5、教養が高い。

6、まとまった人生観がある。

(日本の新人について)

1、西洋のまねごとである。

2、消極的である。

3、強く引き寄せられる感じがない。

4、宗教、習慣を打破するだけで理想がない。

5、教養が浅く、思想内容が小さい。
6、敬虔な人生観がない。

(ハ)主人公小泉純一の生き方について、
1、日本の新人に見られる表面的な浅さを改めようとしている。
2、物事に動揺し、感動しながらも深く考え、分析し、吸収して成長していこうとしている。
3、情熱をもって、純粋に誠意ある生き方をしようとしている。
4、出世間的自己を持とうとしている。
5、積極的新人になろうとしている。
6、自律的に生きようとしている。
7、立派な小説家になろうとしている。
8、人生観を確立しようとしている。

(ニ)本文中の疑問点
1、活字は自由でも思想は自由でないからね。
2、雪嶺の演説のように、訥弁の能弁だというでもない。……雪嶺の演説を速記で読んだと同じようである。
3、なんでも日本へ持ってくると小さくなる。
4、懐疑に安住する。

第四時　（6月13日）

前時の話し合いの記録をプリントにまとめ、各自に配布し、それに基づいて授業を進める。

一、主人公純一についての感想、印象の中から主なものを取り上げ、各グループにその説明をさせ、また考えさせる。例えば、
○「多少、動揺性がある」については、
(1)、純一の動揺性はどんな所に見られるか。
(2)、純一はどうして、こんなにまで動揺したのだろう。
(3)、もし、君達だったらこんなに動揺しただろうか。
(4)、この動揺にはどんな意味があるだろう。
こういう問題を通して、生徒達に、この動揺は単なる不安定、頼りなさではなく、また純一が若いという理由だけでもなく、もっと深い生き方というものに関係のあることをわからせる。また、
○「眼識、能力、教養にすぐれている」については、
(1)、これは、本文中において友人大村のことばになっているが、どうして、大村にそう思わせたのだろう。
(2)、君達も、この純一についてそのように思うか。
などと、生徒に考えさせる。それによって、大村との会話に純一の眼識、能力を思わせるものがあることを確認させる。同時に、それは純一の生き方につながる大きな問題であることも知る。
そうして、これらの問題は後に主人公の生き方に関する段で取り上げることにし、それまで各自頭の中に留めておくことにする。
大体以上、主人公についての感想をもって本時の導入的な役割とする。

二、すでに話し合ったところの、西洋の新人と日本の新人との相異を正確に把握させる。
○まず、新人とはどんな人をいうか。
(1)、解答となるべき部分を本文中より指摘し、それを音読させ

る。

(2)、新人とは新しい人。新しい人とは現代人。現代人とは求める人。求める人とは？といった具合につきとめて、新人の概念を把握させる。

○次に、「西洋の新人」「日本の新人」に相当する人々は、具体的に誰々かを問う。

西洋の新人として、イプセン、ゾラ、メーテルリンク、ヴェルハーレン、ロダンなどが本文中より指摘される。

日本の新人は、第二時に行ったグループ発表を思い出して、本文中には出てこない日本の自然主義文学者、藤村、花袋、秋声、白鳥、泡鳴などがあげられる。

○そこで、西洋の新人イプセンから理解していくことにする。

(1)、イプセンに触れた部分を音読させ、世間的自己と出世間的自己というイプセンの個人主義の両面を説明する。この出世間的自己ということばは、純一にとって、「人生いかに生くべきか」という雷光的な啓示であったこともつけ加え、彼の動揺性を明確にしておく。

(2)、次に、イプセン、ゾラの両者について触れてある部分を音読させ、彼等の理想、芸術がオートノミー（自律）によることを、わかりやすく説明する。われ〳〵の生活においても、権威や本能的欲望に拘束される他律的な弱い態度の多い例をあげて、反省させ、オートノミーのいかに重要であるかを説く。

(3)、さらに、メーテルリンク、ヴェルハーレン、ロダンについて触れた部分を音読させる。各グループで話し合った際、指摘されたこれら西洋の新人の持つ敬虔さというものについて、さきほどのオートノミーと関係づけて説明する。

○日本の新人を理解するため、本文中、大石という人物（正宗白鳥をモデルとする）に触れてある部分を音読させる。この部分においては、大石（白鳥）と拊石（漱石）とを対照させているので、青年純一が（鷗外の作家的分身とも言える純一が）当時の自然主義者白鳥と、この流れに抗する漱石の個人主義とをどう見つめ、どう解したかを、興味深く取り上げることができる。すなわち純一は、

〔大村に対しては〕

(1)彼を大きいと思った。

(2)彼が何物をか有するとは思わなかった。

(3)彼の因習、前ぎめの破棄は周到だと思った。

(4)自分もいま一洗たくしたら、彼のようになれると思った。

〔拊石に対しては〕

(1)彼は何物をか有していると思った。

(2)その何物かが究明できないので、気になった。

(3)自分が動揺したのは、この何物かによって与えられたものだと思った。

このように両者を比較した後、拊石の有している「何物」の実体を究明するために大村との会話が、これほど禁心に交わされたことを述べ、次のような会話部分を摘出する。

「……新しい人はつまり道徳や宗教の理想なんぞにとらわれていない人なんでしようか。それとも何か別の物を有している人なんでしようか。」（純一）

「消極的新人と積極的新人と、どっちがほんとうの新人かということになりますね。」（大村）

そこで、

消極的新人とは、道徳、宗教の理想にとらわれない人。因習や前ぎめを破壊していく人。……大石のごとき人。

積極的新人とは、何物かを有する人。（純一にとっては真実の生き方をする人）……拑石のごとき人。

このようにまとめた後、さらに両者の相異を述べ、日本の新人とは前者のごとき傾向を持つ、すなわち知性に裏づけられた個人主義を持ち合わせないこと、わが国の自然主義者が、これにあたることを説明する。

第五時

（6月16日）

主人公小泉純一はどのように生きようとしているかという問題に入る。

そこで、今一度本文全体を顧みて、次の諸点を整理把握することにする。

1、拑石のイプセンについての話によって動揺したこと。
2、イプセンは新しい人であること。
3、大石とは違って拑石には何物かがあること。
4、大村との熱心な会話を通して、この何物かを究明しようとしたこと。
5、積極的新人の存在に一抹の不安を抱きながらも、「永遠の希求」を考え出したこと。
6、西洋の新人には敬虔さがあり、引き寄せられると言っていること。

純一を中心に、こういう点を考えていくことによって、生徒達には次の諸点を理解させる。

1、純一のあの動揺は、彼にとってどうしてもなくてはならぬものであった。
2、この動揺は、必然的に大村との熱心な会話を引き起した。
3、この会話には、青年純一の眼識、能力がうかがわれるとともに、自主自立の強力な精神を満たしていること。
4、「永遠の希求」ということばにも、真理を求める理想と、真実の生き方をしようとする清純さとが現われている。

最後に、当時の時代や青年の気持などを、もう少し説明して終ることにする。

その際、先に生徒達が疑問点として指摘した、「活字は自由でも思想は自由でないからね。」「なんでも日本へ持ってくると小さくなる。」などを都合よく説明に用いる。

幸徳秋水事件に対する鷗外の意見とも見られる作品「かのやうに」の解説や、また日本旧来の伝統的なものと新しい西洋的なものとの合流により、思想的混迷、不消化現象を起した時代、社会の説明をする。

たとえば、西欧のすぐれた文化が日本に移入されると、それが皮相的に理解されて、本来の偉大さが見失われ、卑小になること。これは、日本の社会がまだ封建性から脱却できずにいるためで、日本の知性の欠如に原因があることなど。

しかし、そういった中にあって求道精神を持って生き抜いた知性

的青年純一の姿は偉大である。時代は異っても、青年純一の姿には現代に生きるわれ〳〵に教えるところ、考えさせるところのものが多いこと、また、さらにイプセンの「出世間的自己」「オートノミー」はぜひ現代人としてわれ〳〵の消化吸収しなければならない要素であることを強調する。

第六時

（6月20日）

五時間にわたる学習によって、生徒達はそれぞれに感心したこと、教えられたこと、考えさせられたこと、あるいは疑問に思ったことなどがあることだろう。それを感想文としてまとめさせることにする。

その感想文のうち、主なものを次に掲げることにする。

A（男）

純一は狩石のことばに大きく動揺した。しかし、その動揺の実体をすぐれた眼識と能力でもって究明した。われ〳〵も、今後実社会に出て、種々の動揺に見舞われることも多いと思うが、それに備えてしっかりした眼識、能力を身につけておくようにしたい。

B（女）

「活字は自由でも、思想は自由にならないからね」というようなことばは、現在言われなくても、もっと別の大きなものが、青年純一のように純粋、誠実に理想を目指して進もうとする足どりを妨げているようだ。われわれは純一の生き方に示唆を得て、現代に生きる生き方を考えなければならない。

C（男）

僕は古い因習に慣り、反対はしてきたが、ここに「青年」を読み、人間は理想を持たなければならない。理想を持ったならば、それを建設していかなければならないことを教えられた。

D（男）

純一の直線的、積極的で純粋な態度に圧倒される思いがした。

E（男）

純一は文学と人生問題に対して激しい情熱を燃やしている。これは青年時代に悔いを残さず、全うする態度でもあり、また彼の人生にも千金の価値をプラスすることになるだろう。

F（女）

純一の謙虚さ、素直さ、まじめさは、われわれになくてはならぬものである。

G（女）

大村という大きな壁に、小さなマリがぶっかって行くような純一ではあったが、最後にはその壁を揺り動かすほどの強烈な探究精神に心を打たれた。

H（男）

狩石の話を聞く純一の態度は、授業を受ける僕達の態度に通じるものがある。純一は、思いもよらぬ狩石のことばを敏感にとらえ、それを解明するのに非常な熱意を示している。果して、僕達は授業中、それだけの敏感さと熱意とを持っているであろうか。

I（女）

立派に生きるためには、安易な方法をとらず、多くの刺激を吸収することにより、動揺し、苦労し、悩まなくてはならないということを痛感した。

J（男）

文学作品を鑑賞するには、鑑賞できだけの能力を養うことだ。

多くの本を読み、正しく作者の意図も理解できるようにしたい。その上で、作品の批判もし「いかに生くべきか」という究極の問題にも結びつけて行きたい。

K（男）

この「青年」を読むことによって、自然主義文学者の人達がつまらない人達のように思われた。しかし、藤村、花袋らはやはり偉大な文学者であると思われる。それは間違いでしょうか。

以上の感想は一部分ではあるが、それ〴〵に個性が見られて、なか〳〵おもしろいと思う。そして、各人ともこの作品を正しい方向において解釈していることもわかった。

なお、感想文の中にまだ多少の問題が残されているようだが、これは後に単元のまとめの段階において解決したいと思っている。

――おわりに――

私は、この「青年」という教材を取扱うに当たっては、できるだけ単調に陥いるのを避け、変化と動きのある六時間を考えた。そこで、生徒の学習活動も、グループ学習、発表、話し合い、感想文などとかなり巾の広いものとした。そして、指導の重点も「人生いかに生くべきか」という問題に置いた関係上、どうしても生徒自身が考える自由的な学習にすべきだと思ったのである。

それでも、今、全六時間を顧みると、指導者が生徒を引きずった感じが強い。また、作品の解釈にとらわれすぎたきらいもある。作品を客観的、批判的に眺めることの少なかったのも反省される。

この作品に対する鷗外の執筆態度、この作品と時代との関係などは、漱石と合わせて単元の終りにもう少し説明を加え、理解させるようにしなければならない。

以上、私の指導経過について、厳しい御批判をいただければ幸です。

昭和三十四年九月一日（火）